

国立西洋美術館 前庭リニューアルについて

前庭リニューアルについて

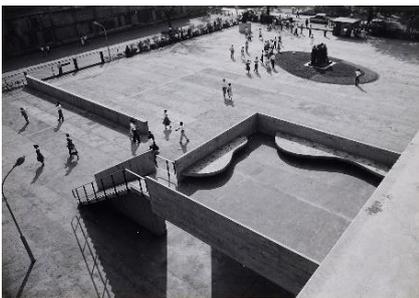
国立西洋美術館は2020（令和2）年10月19日から2022年（令和4）年4月8日までの約1年半にわたる休館期間に、フランスの建築家ル・コルビュジエの設計による前庭のリニューアル工事をおこないました。

当館の前庭は1959年の開館以来、美術館としての機能の向上を目的に、様々な改変が行われてきました。一方で、2016（平成28）年に本館と前庭を含む敷地全体がユネスコの世界文化遺産（「ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—」）に登録された際に、当初の前庭の設計意図が一部失われているという指摘がなされました。そのため、今回の工事では、地下にある企画展示室の屋上防水を更新する機会に、ル・コルビュジエの本来の設計意図が正しく伝わるような形で、前庭を本館開館時の姿に可能な限り戻すことといたしました。

本館開館時の正門は、上野公園の噴水広場に面した西側にありました。前庭は、植栽の少ない広いオープンスペースとなっており、外部との連続性を持たせるため、園路から彫刻や本館を見渡すことができる透過性のある柵で囲われていました。前庭の床面には、この西側の正門からロダンの《地獄の門》へと一直線に伸びる線と、途中で左に直角に曲がり本館へと誘う線が引かれていました。このT字の線は、床の目地の中でも特に目立つように敷かれ、人の動きを誘導するかのような役割を担っていました。

この度の前庭リニューアルでは、植栽を最小限とし、西側の門からのアプローチと開放的な柵、ロダンの彫刻《考える人》と《カレーの市民》の位置をできる限り当初の状態に戻しました。またル・コルビュジエが人体の寸法と黄金比をもとに考案した尺度である「モデュロール」で割りつけられた床の目地も、細部に渡って復原しました。

園路から前庭、そして本館へ。ル・コルビュジエの思い描いた建築空間を、ぜひご体感ください。



1959年 本館開館時の様子
(撮影：東京フォトアート)



2016年の前庭の様子



2022年 工事後の前庭の様子

本館「19世紀ホール」の無料開放について

「19世紀ホール」は、ル・コルビュジエ設計の当館本館の中心に設けられた吹き抜けの大空間で、当館常設展の起点となる場所です。ル・コルビュジエの命名に由来するこのホールには、天井部分に三角形に開けられた明かりとりの窓があり、やわらかな自然光が注がれています。

「19世紀ホール」からスロープをのぼって2階に進むと、この中央ホールをぐるりと取り囲むように配された展示室をめぐることができます。こうした「19世紀ホール」を起点とした螺旋状の動線は、まず中心に核となる部屋をつくり、コレクションの増加と共に展示スペースを外側に増築してゆくというル・コルビュジエの「無限成長美術館」のアイデアを反映しています。

ル・コルビュジエは、「19世紀ホール」を近代の始まりにあたる19世紀の技術や芸術を象徴する空間とみなし、印象派を中心とする松方コレクションの主要作品を展示するとともに、19世紀という時代を表す様々なイメージをコラージュした写真壁画を設置することを構想していました。彼の写真壁画が実現することはありませんでしたが、現在ホールには、19世紀を代表する彫刻家であるロダンの作品が展示されています。

これまで「19世紀ホール」を有料エリアとし、観覧券をご購入いただいていたましたが、リニューアルオープン後は、当面、どなたでも自由にご覧いただけるようになります（2階展示室へと続くスロープより先は、これまで通り観覧券が必要となります）。是非、ル・コルビュジエこだわりの建築空間に、何度でも足をお運びください。



[報道関係のお問合せ先]

国立西洋美術館 広報事務局

株式会社ユース・プランニング センター内

TEL：03-6821-8229 E-mail：nmwa(at)ypcpr.com

（受付時間：平日 10：00～18：00 ※土日祝日・年末年始等の対応はしていません。）